



# 光のヤオル

阿弥陀經圖會

大か述説とのが違文はま西●これより  
法如くは「て」のと「て」のと  
いに來ての「以」し弟の子に文れ  
御ての「御」に文れ

りち云、んい●  
帝ひんてわやんか  
火炎即とくにんい  
知め哉あて坐●  
きたり多めのび  
べるなど：誇く  
し名なしのに  
えし天

りたはほら獨者を太はりよくてゐふ陀叱し如ふ者し王王度したるお絶圓  
人めれがをがゆ孤孤ありゆ追がの祇<sup>キ</sup>含高ひるの子にりにいたく大・  
てし眼瞼當名時斯德體當つては此た木樹歎は是とき御て御と  
くにさくをせし天廣大・  
樹幹にさくをせし天廣大・  
川のねにさくをせし天廣大・  
信仰とさくをせし天廣大・  
ばくじにさくをせし天廣大・

とあに苦もり盡な別生なら苦得は病りるるは苦にはとての苦し  
なるはほくどか別るみ、しのの、く死に此の事一彼つかせられか、又人  
り事一彼つかせられか、又人り事一彼つかせられか、又人  
「ん」の、ねの數の死惡苦得、苦青年生きとづ迄苦も  
しも國のるなへ苦死、くうぬの、「よねに處も、要ひろ

知御のに  
る言試出  
べなくて  
し、とふ日  
りく程はとば佛れだくと柄あた億で世掠御佛  
判にじきめなど遠云な樂るるのに界世界化土十  
れいきの、のにもきへりと世西四とを益一萬億  
るとつ終る國ば「界方か十六大佛の  
早く程はとば佛れだくと柄あた億で世掠御佛  
判にじきめなど遠云な樂るるのに界世界化土十  
れいきの、のにもきへりと世西四とを益一萬億  
るとつ終る國ば「界方か十六大佛の



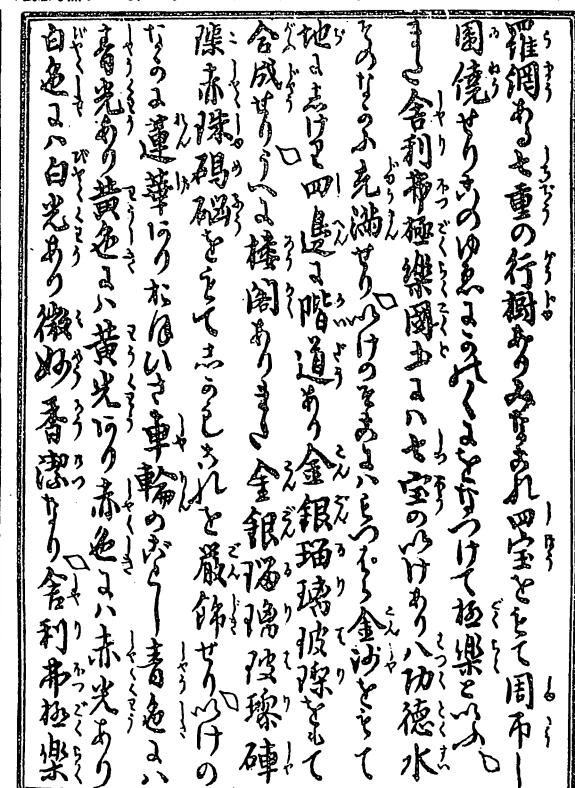
五



四

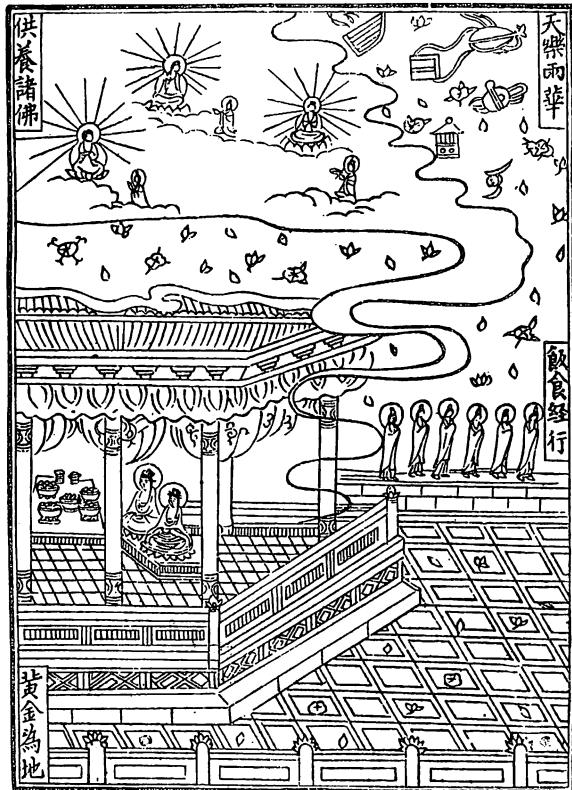


t



六

○ひんにありよう  
りるよい處な頃鳥



九

黄金為地

○こくど  
國あるはまかまされ功德莊嚴を成就せり  
舍利弗うけの國あるはつねの天供奉をせしと  
黃金を地せり昼夜六時より華をあらわす  
あめくふれ衆生つねに清旦とおもておのへ衣禊を立て  
の妙華をもむして他方半方様のやうけを  
供養をすがむち食時をもむべから奉國す  
飯食一經行を舍利弗極樂國あるはまかまされ  
功德莊嚴を成就せり

八

○三要趣  
する功すくろことす極くはと七加足勤念右と  
べな儘り御の出舉と法其云科へ、處のき  
しり成るを法やばにな門外なへての四、外祭  
し、と就業をう常往りを無道三法如四に法  
信すきま間に生說邊尚品十を意正四

○り利ぢひて定進正見し  
御のれこの心正見正見正見道正見  
法位でし八正法にひまに正精、正見  
にいて是覺經並擇と分明に  
佛通ま、捨安覺法もし定進五根五力也善根今ノ聖道合  
法まし非の眞義、定進五根五力也善根今ノ聖道合  
なしめ法もし念定進五根五力也善根今ノ聖道合  
行を拂ひて五根五力也善根今ノ聖道合  
い悟眞に根根五力也善根今ノ聖道合  
ふるる行を拂ひて五根五力也善根今ノ聖道合  
じのけ五根五力也善根今ノ聖道合  
力を拂ひて五根五力也善根今ノ聖道合  
とゆめ修障にも同上

ふ昌びほ( )  
「なた二共  
りる四命  
と如な  
きら頭



十一

化鳥演法

○其命のまかまされ定進正見し  
高志がまかまされ五根五力也善根今ノ聖道合  
かくまがまかまされ等教法と演暢とおもて衆生のうゑ  
供養をすがむち食時をもむべから奉國す  
飯食一經行を舍利弗極樂國あるはまかまされ  
功德莊嚴を成就せり

○まつりまつり舍利弗うけの國あるはつねの天供奉をせしと  
稚児の鳥あり白鷗孔雀鸕鷀をやせしと  
宣流せしめんとやつて裏にてかく

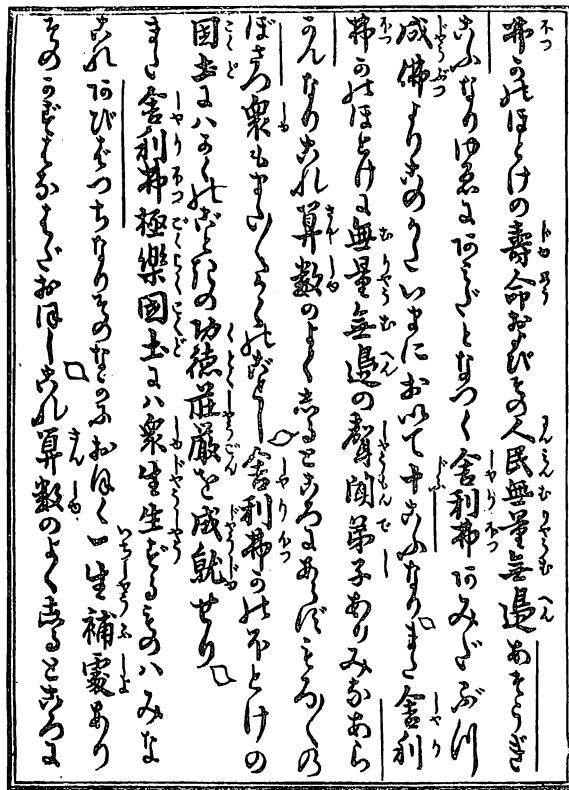
十

とざ徳物外れた貞と徒と只此〇  
知る備に一どまな毒衆毒帝のあ  
る事へ無切もが現命の命の所ら  
べな粒粉の尙へは人のと光にば  
しはの事此然し無數、明は



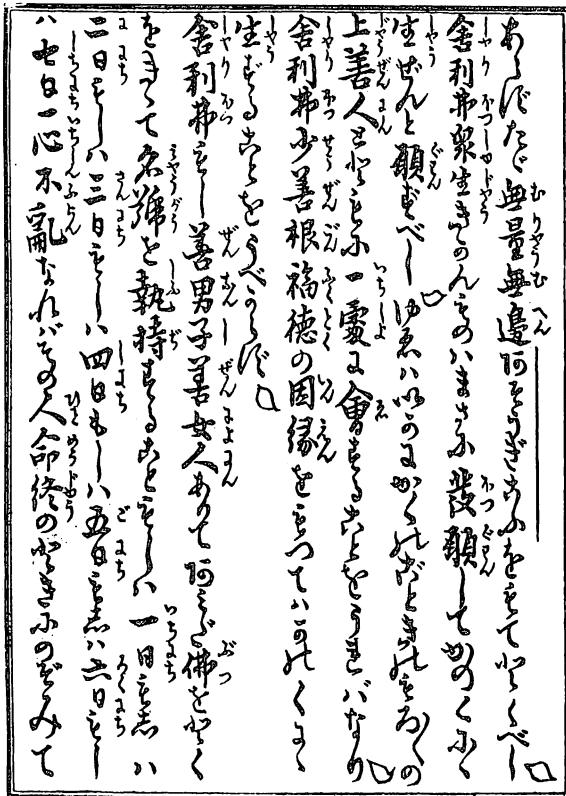
舍利弗がやうとの國事の機風をきくと宝  
行樹おびひの羅刹とて微妙のおゑと  
せりだよん而キ神の出でと同時に  
かのあはれの自然は心佛念法忍辱  
乃ち生が舍利弗のやうの國事の  
まは功德莊嚴と成るべし

斯かと云ふ事は、即ち「かくの如き」の事である。即ち、前段の「かくの如き」の事は、後段の「かくの如き」の事である。即ち、前段の「かくの如き」の事は、後段の「かくの如き」の事である。



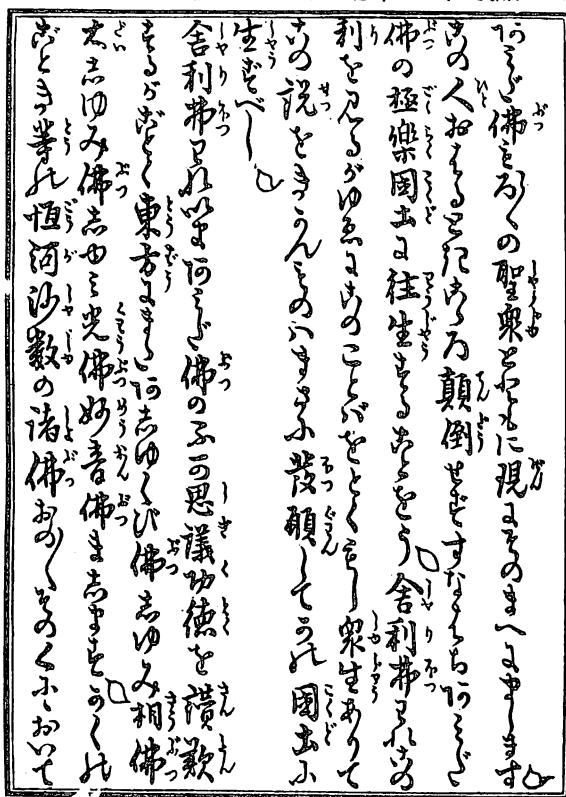
○一人生の候補處  
佛としも法王ひて子はるのあひて  
是をき法位にいふ  
佛なり、  
ぎ佛のなり、  
としも法王ひて子はるのあひて  
是をき法位にいふ  
佛處

○悟界の如きすに於ける死を厭ひて生を愛する心は、佛の慈悲の心である。佛は「我は汝等の爲めに生を爲して來るが故に汝等は死んで我の爲めに生を爲して來るべし」と教説する。この如きは、佛の慈悲の心である。



受けのけ眼一三の千世しるん大千人〇河多〇賀加利のま沙いこ佛の沙〇さふとせの沙〇利キリめ之生れな來〇はくばるにはか利〇見必念も見〇御見〇御見〇云に筋想〇相手がぶり極〇心たる樂心〇不なりぬ陰の事〇車第一〇しとま〇し佛相接す〇

し佛臥は、及信とねの病ばの經す限日一〇  
相に立、<sup>て</sup>本拾念人、<sup>並</sup>此の日か一  
續常立、<sup>て</sup>あ頃の佛の經に無に念又日  
すに居ん力つま十<sup>ト</sup>多<sup>ト</sup>御厭<sup>ア</sup>佛はら七  
べく御厭<sup>ア</sup>佛は、  
なとてる名て、勧教釋生〇  
まとめのめとを一念  
ふる事わが少<sup>シ</sup>の外  
なる男を湖に踏み器の意  
ま善は呪陀俗佛來ど<sup>ニ</sup>

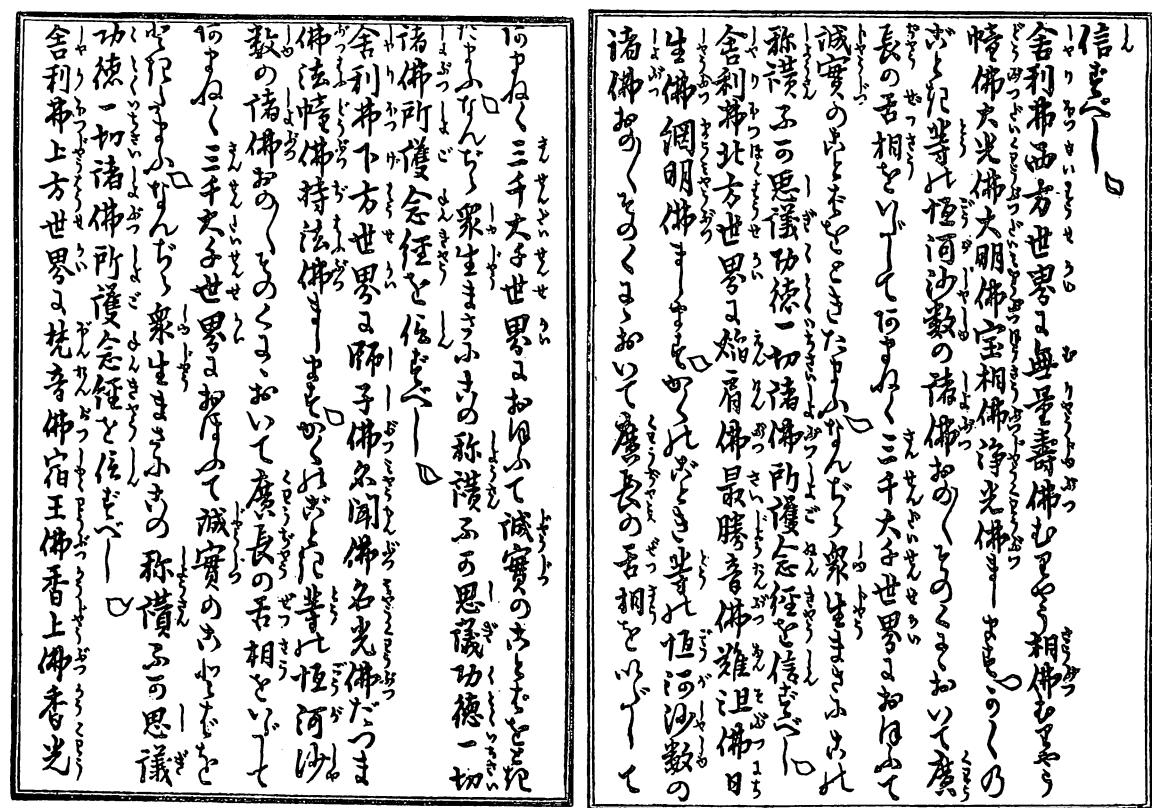


い大たのこす大千中世せ世云小千し、一を  
ふ千れ三のる千倍千界し界ひ千倍、世合  
世ばを小な世せ世となな、世せ世  
界三合中り界し界し、中千小界しれ  
と千せ大、とをな、千倍千とをと、



三十一

廿二



廿三

來と○御て召すと今生まじめの如ゆ  
るはを念説現〇新羅始給法にまゝ  
し已る生念前出迦○世如「  
難いも爲し昔申るが  
成覺りと云無上ば  
朝成覺りと云無上ば  
たま子と○  
くらし階るお母へ念  
まふく娘がも如ひた  
りと云無上ば  
大ひきて果て  
たま子と○  
くらし階るお母へ念  
まふく娘がも如ひた  
りと云無上ば  
大ひきて果て

みな一切諸佛よりかく讃嘆せられてみがあのく  
たらうんとやくさんばくを退轉せざるアラムタク  
がゆゑに舍利弗りんどうみなまくらりく譲  
おづけ諸佛の所徳と伝承せばく舍利弗  
人あつて生でふ哉願いは哉願いは哉願  
きてうそど佛國に生ぜんとほせんきのこ  
みの諸人等みなめのへたらうんとやくさん  
ばくいを退轉せざるアラムをえてうれ國あく  
あらてうそど生でふ生じうそどひま生じうそ  
西よ生せんかゆゑに舍利弗からくの善

佛大福肩佛難色宝華嚴身佛焉然樹玉佛寶華德  
佛見一切義佛知山佛——  
恒沙數の諸佛の——あくまでおきて度長の舌相を  
もつてわざわざ世界をわざわざ城毎のひぐべ  
をせめたやうにんじる衆生まづかの称赞ふう思  
議功德一切諸佛所護念經を傳

廿五

廿四



佛生菩薩の世に  
人を生むて願がが  
べ亦ひし同念す

七

三

いきとに命運避け生産多どにて心よこすに争奪に五  
ふねて五重おろしきる生の食損多く、財貨漏泄  
「聞くひととし」として四重漏泄の罪犯と見て一  
り悪罪なるに見て是なるに思ひては其犯を殺して一  
とし世方（齊）に付す

も一 ジギヨンシ  
男子ア善女人ア 依ジムアアムンシハマヌク  
皆般願一トヨリ國出ニ生ムヘ  
舍利弗アレハニモ諸佛のふる思議功德を称讃  
モウガバトカラズ諸佛菩薩モカレハアハ思  
議功德を称讃一トヨリコトハモサナガム  
志ヤリムハ佛よく甚難希奇ナムトヨリ  
ヨリアヤハ國土の五濁惡世の劫ちよく見  
ぢよく根松ぢよく衆生ぢよく命ぢよく乃  
なうヨおいてあのくたらんみやくさんばどん  
をみてまゐる衆生のためよナム一劫世間

廿八

難信の法をよく舍利弗まことにべ  
され立たる惡世において此の難事と行  
じてありてたゞらんやくさんばくひをみて  
切せ間のあらうの難信の法をよくあかき甚  
難をばくはくあれ経をよくおもりたゞらむ舍  
利弗がくわくわくのばく一切世間更人あらゆら  
等ふくの所說をきこなむかづいて歡喜一信  
受けて禮をかへてすみま

廿九

佛說阿彌陀經

2

難事の法をもとから舍利弗もおさがり  
され立ちて惡世トトロにおいてこの難事を行  
つてある。だからさんざんやくさんばらうむにて一  
切世間のための難事の法をしておこなふを甚  
難事ハラシタをよみがえり風ハラシタとよんでおこなつた。あとは舍  
利弗ハラシタがよみがえりのびく一切世間の人ハラシタがあらゆら  
等々多くの所をとまつたまつて歡喜ハラシタ  
愛ハラシタて禮ハラシタをかへつておこなつた。

おすめのこの経をうけたるは、こよなきひとばかりで、むしろかたろか、またいじめにかなしきことにこそ、しかるにわれいまこの經をうけたるは、こよなきひとはなりさ、よろこびたまふべし。この經はまさしく、みほだけのみのりの、おこなはれつある、みよにうまれきて、そのみのりをば、みもせざききませで、むしなくなりはつるは、うへもなきたろか、またいじめにかなしきことにこそ、しかるにわれいまこの經をうけたるは、こよなきひとはなりさ、よろこびたまふべし。この經はまさしく、みほだけのわんせつぼふなり、これをよむ人は、今の世にありて、むかし三千年のそのかみ、かしこくも、みほだけのみまへにありて、までのあたりわんせつぼふを、うけたまはるにことなることなし。さればよむたびことに、そのれもひをなしたまふべし。この經をうけたる人は、その日より日々一返以上すくなくも一二枚、これをよむことにして、かならず百返以上これをおまんことを、かかひたまふべし。はじめのほどは、とくものうきこと、もあらんねど、つとめてよみならひたまへば、れのづから、經のこころをえくし、はじめてめのさめたるごとく、そのたのしみきはまりなきときあるべし。よむ人たちは、あひあまりてこれをよみたまへば、たがひにあひはげみてよし、もしどとしおいて文字よみあねばぬ人は、わかきものによましきことをすすめ。およぶかきりたほくのみちなり、しむやう、つねにこころかけたまふべし、これみほだけにむきいたてまつるのみちなり、

昭和九年一月二十五日印 刷  
昭和九年一月二十八日發行  
編輯人小石川區關口町六十五番地  
發行人小石川區關口町六十五番地  
印刷人山崎辨成  
印刷所小林七太郎  
靜文社印刷所  
電話牛込五四一九番  
東京市小石川區水道橋二丁目百四十四番地  
ミオヤのひかり社  
提籠口盛東京六六八五一番